
海送り - s e a s a w -

e s t

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

海送り - sea saw -

【Nコード】

N6802C

【作者名】

est

【あらすじ】

僕には幼なじみが二人いる。片方は大切な親友でもう片方は大事な恋人。けれど、そのうちの親友はもういない。これは、いなくなってしまった影を追い続ける「僕」たちの小さな物語。

第一話（前書き）

夏ホラーに出展予定だった作品ですがホラーはありません。

知り合いには夏ホラー参加拙作の「箱と少年」とは違う人間が書いたんじゃないかとまで言われました。

読みやすい文体で書いているつもりなので、どなたでも読めるはず
です。

過ぎてしまった夏の空気を感じて頂ければ、そして読んでくださっ
た貴方が何かを心に思ってくださいれば幸いです。

それではしばらくの間、お付き合いをお願いします。

第一話

潮騒は、一瞬にして悪魔の笑い声へと変貌した。

厚い雲に覆われた空はまるで真つ黒な血をぶちまけたかのようで、次々と迫り来る波は何もかもを奪い去りに来たかのように見えた。そして頬を撫でる潮風は、僕のことを嘲笑っているかのように気持ち悪く吹いた。それは絶望の光景だった。

僕は激しく後悔した。どうしてこんなことになってしまったのか。浜辺でへたり込みながら、両手の爪を顔に食い込ませ、気が触れたかのように絶叫しながら、止めどなく涙を流したことを僕は今でも覚えてる。

猛り狂った青黒い怪物を前にして、僕達はあまりにも無力だった。

海送り - sea saw -

自転車の荷台に人を乗せて走ることに、随分と慣れたと思う。

最近ではカーブに差し掛かっても転びそうになったりすることはなくなつた。最初の頃はバランスを崩してよく転んだりしていたものだけだ。乗せられる方も随分と慣れたようだった。怖いからスピードを落とせとか、脚に変に力入れて筋肉痛になったとかいう話も最近では滅多に聞かない。

「涼しいね、今日」

ミサキの高い声が後ろから響く。僕はやる気のない声で適当に返した。後ろが涼しいのは乗せられているだけで他には何もしてないからだ、前で漕いでいる方は汗だくで息も絶え絶えでもう死にそう

なんだぞ、とは言わない。

夏休みが始まる日に、こうしてミサキと二人乗りをしながら高台を目指して走るのも、もう7回目になる。それは僕が親友を失ってから7回目の夏が来たということだった。そして同時に、ミサキが双子の兄を失ってから7回目の夏が来たということでもある。僕達にとって、今日という日は特別な日だった。

蝉の音が、うるさく響く。

僕は小学校に上がると同時に、この海辺の町に引っ越してきた。

それまでは都会に住んでいた僕にとって、ここは未知の世界以外の何物でもなかった。父親がどうしてここにマイホームを建てようとしたのかは僕には分からない。それは例えば、自然に溢れた田舎町で僕を育てようとしたからなのかもしねなかったし、ごみごみとした都会に疲れてのびのびとした場所に住みたいと思ったからなのかもしねなかった。

ところがいずれにしても、当時の僕には家の周りに当たり前のよう存在している海とか森とかの自然が悪夢にしか思えなかった。狭い路地や密集する団地がそれはそれは恋しかった。こんな場所で生きていけるのか、小学生にもなつてなかった僕がそんなことで悩んでいた。今思うと、あまりにも大袈裟で心底笑えてくる。

というのも、思ったより早く　　というか一瞬にしてこの町に打ち解けることが出来たからなのかもしねないけれど。

要はきっかけさえあれば何でも良かったのかもしねない。子供は案外早く環境に適応できるものであるらしく、僕には友達が出来たということが大きく作用して、結局のところ三日とかからずここに受け入れることが出来てしまった。

引っ越した先の隣に住んでいた、双子の兄妹。エイジとミサキ。二人がいなかったら、僕はここの自然に飲み込まれてしまってい

たかもしれない。

二人にはとても感謝している。

それにしてもこれがとてつもなく明るい性格をした二人で、僕らは会ってすぐに、まるで生まれる前からの友達であったかのように仲良くなれた。とにかく馬が合ったということなんだろうけれど、今にして思えば、なかなか奇跡的なことだったような気がする。

それも、もう10年も前のことだ。

走りながら帰る六年生くらいの小学生の一団と、すれ違う。この時間に下校しているということは、今日は僕達と同じで終業式だったということなのだろう。

彼らが急いでいるのはきっと、今夜から明日にかけて行われる、この町のとある大きなお祭りに参加するための準備があるからだ。家に着くなり、押入れの引出しの上から二番目辺りに入っている浴衣を取り出したりするんだろう。ところで僕達も運営側の準備を手伝わなければいけないから、夕方には町役場に行かなくてはいけない。何しろ近くの市町村から、町の総人口が2倍になるんじゃないかと思えるくらいにお客が集まる、そんな大規模なお祭りなのだ。おかげで地元の高校生や中学生もいろいろな仕事に借り出される。過疎が進むこの町では人手が不足しているのだろう。

小学六年生か、と僕は小さく呟く。ミサキは特に何も返さなかった。聞こえなかったのかもしれないし、何も反応しなかっただけなのかもしれない。何にしても黙ってくれているのは、今はありがたかった。

高台の入り口に入った。

道端に乾いた唾を吐きながら、ペダルを漕ぎまくる。このまま直進をすれば、目的地に辿り着ける。心臓破りの坂を越えれば、あとはもうこっちのものだ。

ここを二人乗りで登り切るにはコツがいる。僕は勢いを付けて助走を始めた。ちょうどその時だった。

ミサキの僕の腰に回した腕に、ほんの少しだけ力がこもった。

僕は敢えて気付かないようにする。でも、理由は分かっていた。

僕達が目指しているのは、高台にひっそりと作られた、海で亡くなった人のための慰霊碑が置いてある墓地。

エイジの名前が彫られた石碑がある、その場所なのだ。

五年前にエイジが死んだ時、ミサキは大声を上げてわんわん泣いた。壊れたみたいに、泣きまくった。僕も泣いた。二人で泣き明かした夜を忘れることは、きつと死ぬまでないと思う。

ミサキは思い出しているのかもしれない。毎年夏にここに来ると、いつも明るく笑う彼女が嘘みたいに静かになってしまふ。目が虚ろになって溜め息ばかりを繰り返す、そんなミサキを見るのは、僕にはつらすぎる。

彼女の胸の感触を、薄手の夏服の背中に受けながら、僕はそのことがとても嬉しいくせに、切なく悲しい気分を味わっていた。

勢い良くペダルを漕ぐ。もう坂も中盤だ。

第二話

ところで、そんなミサキに告白をされたのは今から1年と3ヶ月
前、高校生になってまだ間もない頃だ。

ミサキとは本当に長い付き合いで、小中と同じ学校なのは当然で
も、とうとう高校まで揃ってしまったと分かった時には思わず笑っ
てしまった。家が隣同士で高校まで同じな男女なんて、マンガの中
にしかないものだと思っていた。これでクラスまで同じだったら
もう死ぬまで一緒な気がしなくてもない、互いに笑い合ったりし
たのが中学卒業記念のクラス会。まさか本当に同じクラスになって
しまつとは夢にも思わなかった。

笑うしかなかった。

そんな彼女とは、僕はずっと腐れ縁を続けていくんだろうと勝手
に思っていた。でも、それは違った。彼女の方はそれでは満足しな
かったらしく、本当に突然、誰もいなくなった夕暮れの教室で不意
打ちを僕に与えてきたのだ。

「私さ……ツカサが大好き。だからさ、私と付き合つてよ」

実に彼女らしいストレートな物言いだ。それもただの「好き」
ではなく「大好き」らしい。勿論僕は呆気にと取られて何も言えなく
なってしまった。まさか来るはずがないと思っていた相手からの突
然の告白。しかも夕暮れの教室。もう何から何までマンガみたいだ
った。彼女の告白は続く。

「そっちは全然気付いてなかったと思うけど、私ずっと、ずっと前
からツカサが大好きだったんだからね」

そして実に彼女らしく、追い討ちまで仕掛けてきた。悪戯っぽく
にんまりと笑って、言っちゃったと彼女は笑った。それは随分と嘘
くさい笑顔で、それを見た僕はここでやっと、笑いながらも声を上
げることが出来た。

「僕だつて」

ミサキの顔が、今度は優しさにほんの少しだけ切なさを混ぜたような笑顔になった。短く切り揃えられた黒髪が、夕暮れの風に靡く。それは、可愛いを通り越した、言葉では言い表せないような笑顔だった。

告白されてから初めてのキスマでたつたの3分だった。

キス。初めてだつたたくせに、それはまるで大昔から知っていた動作だつたかのようで、不思議だつた。

ミサキは激しい性格をしているけれど、かなり可愛い女の子だと僕は思っている。

中学生も後半の頃に、彼女は化けた。小学生の頃は男の子に間違えられるようなタイプの、あまり可愛くない女の子だつたけれど、ちょうど背が伸びなくなって胸が膨らみ始めた頃から、彼女は徐々に可愛い女の子に変化をしていった。彼氏の一人や二人くらいいてもおかしくはなかつたような気もするのにも、不思議とそんな浮いた話は聞かなかつた。だから恋愛には疎いのかもかもしれないと、そう勝手に決め付けていた。

疎かつたのは僕の方だつた。幼馴染みの恋愛というのはちょっと特殊なものかもしれない。

例えば、お互いの好き嫌いなんてものは、自分のこと以上にお互いがよく分かっていたし、大した話もしていないうちから、二人はお互いのことを当然の如くよく理解していた。僕達には、いわゆる付き合い始めた二人がゆつくりと登る、お試し期間と大きく書かれた階段は全く用意されていなかった。いきなり、恋愛1年目に突入したような慣れがあつた。

家が隣の幼馴染み、というのは大きい。

これがもしも高校で初めて出会った二人なら、付き合つて3週間でもう一緒のベッドに潜つてしまつていた、なんてことはなかなかないと思う。初めては僕の部屋だった。2回目はミサキの部屋。それからお互いの部屋をランダムに行つたり来たり。財力に乏しい高校生の恋愛生活はどちらかの家の親や兄弟がいない日というのが原則で、それは今でも続いている。

それにしても、3週間というのは少し節操がなさすぎたかもしれない。少しだけ、反省している。

僕達の恋愛は、こうやつて続いている。

高校生の恋愛にしては、当り障りのない方だと思う。

何にしても、僕はミサキと一緒にいられることがとても幸せで、それがこれからもずっと続いていくことを心から望んでいる。ミサキとこれからもずっと、と考えるとそれだけで心が温かくなる。本当に。

でも、それだけに、越えられない壁というものに気付いてしまった時に、悲しくなることがある。僕はミサキの心の中の、ある大きな壁を越えることが出来ずにいる。

厄介なのは、ミサキ自身がその壁を、認知していないだろうことだ。

それをもつずっと、言えずにいる。

坂を登り終えたら、墓地はもうそこにある。

海が見渡せる場所にひっそりと建っている慰霊碑を囲むようにして多くの石碑が並んでいて、その一つ一つに名前が彫られている。

僕はそれら一つ一つを見る度に、胸の底が苦しくなる。海で死んでいった人々のことを考えると、息が詰まってしまう。親友を失つ

た僕にとって、それは決して他人事ではなかった。兄を失ったミサキにとつては、僕なんかよりもよっぽどつらいものに感じられるかもしれない。

僕は自転車を停めた。かごの中の鞆から、紅茶の入った水筒を取り出す。

ミサキがゆつくりと荷台から脚を下ろした。短いスカートから伸びる太くも細くもない脚は、どことなく震えているように見える。

僕はミサキの手を取って、エイジの墓に向かった。

墓といえど、エイジの骨がこの石碑の底に埋まっているわけではない。

エイジの死体は、とうとう海から上がらなかった。

他の墓も、きつと同じようなものだと思う。

僕は水筒の蓋を開けると、ぬるくなってしまった紅茶をエイジの墓に向かつて注いだ。冷えた苦いストレートティー。そんな子供らしくない飲み物がエイジは大好きだった。

「ごめんな。冷えてなくなつて」

返ってくる言葉は勿論ない。遠慮のない笑顔で笑うエイジを思い出して、少しだけこみ上げた。息を大きく吸い込んで、やり過ぎず。「久しぶりだね。お兄ちゃん」

ミサキは虚ろな目をしながら、墓に向かつて笑いかける。それは力のない笑顔で、僕の前ではあまり見せようとはしない類のものだった。

ああ、と思う。心の中で、小さく黒い気持ちを育ませる。

決して認めたくない僕の越えられない壁が、ここにある。

第三話

ミサキにとって、エイジの存在は大きすぎたんだと思う。双子だから、というものを越えたところで。何か、自分の中の大事な何か
が欠けてしまったような喪失感みたいな、あるいは決して手が届か
ないところに手を伸ばそうとする悪あがきに似たようなものか、と
にかくそうだったものを、ミサキの声や顔は毎年のように主張して
いた。

ミサキは、毎年のエイジの命日にここへやって来ては、虚ろな目
をしたまま墓に向かって語りかける。傍から見れば、それは痛々し
い以外の何物でもないことで、僕はそんなミサキが好きではなかつ
た。一度、やめるように言ったこともあったけれど、彼女はこれを
やめようとしなない。僕はさっきとは別の意味で、涙が出そうになっ
た。

僕はエイジを越えることが出来ないかもしれない。死者はそうい
う部分で、ほぼ完璧とっていいほどに最強なものに思えた。ミサ
キの亡霊のような笑顔を見れば、そんなことは火を見るよりも明ら
かだった。

僕の中で、意味の分からない黒い感情が募る。

死んだエイジに対する嫉妬。でなければ、いつまでも死んだ兄か
ら離れられずにいるミサキへの苛立ち。もっと自分を見てくれと、
そついう情けない願望も混ざっているかもしれない。

いずれにしても、本当はそんなものは認めたくなかった。

そんなものを抱え込んでいる自分はひどくちっぽけに思えた。親
友を失ったという純粹な悲しみを越えたところで嫉妬をし始める自
分なんて。けれど、それを覆せるほどのゆとりを持つことも今の僕

には難しかった。抑えようと、必死に抑えようと、僕は自分に思い聞かせる。

ミサキの棒のような呼びかけは止まらない。

やめるよ、と思う。やめてくれ、と叫びたい。

片思いならまだしも、というものがあつたかもしれない。それならば僕の思いは一方的なものに過ぎなかったのだから。でも、今は違う。僕は彼女の思いを受け止められたと思っていた。そのはずだった。

それなのに、エイジからずっと離れられずにいる彼女は、ひどく残酷な気がした。僕は一体何のために彼女と一緒にいるのか。彼女は何のために僕と。

僕は、エイジの代わりになつたつもりはない。

ここまで来ると、僕の中のミサキへの気持ちは黒いモノに化けつあつた。一方的に募らせた憎しみのようなものになつてしまつていた。

毎年のように繰り返されたこの行動に、僕の我慢はとうとう限界を振り切つてしまったのかもしれない。この時僕は、明らかにキレていた。

だから僕は、瞬時に思い浮かんだ最低な考えを、それを実行することに決めた。

僕はそれをミサキに悟られないようにして、小さく溜め息を吐いた後、両手を合わせて瞼を閉じた。

ごめん、とは思わなかった。

後悔するだろう、とは少しだけ思っていたのが、悲しい。

ここがエイジの墓の前だということなんて、すっかり消えてしまつていた。

「そろそろ帰ろうか」

散々あやしい語り掛けを終えた後で、ミサキがそう言った。それを待つていた僕は、優しいフリをして笑いかけ、彼女の腕を引いた。

「その前に行きたい所があるからさ、寄っていてもいい？」

そもそも、本当はエイジを悼む気持ちがあつたわけだし、それは今だってしつかりとある。別に、こんなことを最初からしたかつたわけではなかつたと思う。

そうだ。そのはずだった。

そうだと思いたかつた。

墓地の近くには、先日、廃館が決まつた公民館がある。

もつと駅の近くで利用しやすい土地が空いたので、そこに移転することになつたからだ。

以来、墓地の近くということが災いして近所の小学生には幽霊屋敷と言われたり、夏の夜には肝試しに使われたり、そんな風にして取り壊しの日をこの公民館は待っている。でも、これも僕らが小学生の頃は立派にその機能を果たしていたのだ。ここにまつわる思い出も、僕やミサキはたくさん持っている。エイジが関わつた思い出だつて、たくさん。

そんな場所に彼女を連れ込むことなんて、造作もないことだった。制服を乱暴に脱がして、半ば裸にさせた後、僕は彼女に覆い被さつた。無理矢理にその唇を埋めると、彼女の抵抗が露になつた。突き入れた舌を嚙んできた瞬間に、僕の中で何かが爆ぜた。もうメチャクチャにぶつ壊してやろうと決め込んだ。

胸を鷲掴みにすると、彼女の口から初めて、やめると叫ぶ声が弾けた。

絶対にやめてやるものか。僕は狂つた動きで彼女の首に齧り付く。お願いだからやめて、と悲痛に叫ぶ。その声を無視して、僕は彼

第四話

結局、彼女を犯すことはなかった。でもだからってどうしたもうしたも、ない。

僕は彼女を犯そうとした。それだけが真実だった。

彼女は僕に笑いかけて、私が悪かったと、私のせいだと、だから僕を許すとそう繰り返した。でも、僕にそんな資格はないと思う。

決して彼女は僕の頬を平手で叩いたり、拳で殴ったり、罵ったりはしなかった。出来ることなら、平手打ちでも罵倒でも何でも良かったから、彼女に嫌われてしまいたかった。

僕は、とんでもないバカだ。

自転車で坂を下りながら、僕と彼女は何も話さなかった。

夕暮れがとつともなくきれいで、僕はそのまま消えてしまいたいと、切にそう願った。

家の前で彼女と別れる時に、彼女は僕に向かって話し掛けてきた。

「明日、一緒にお祭りに行こうよ」

何を言い出すのかと、僕は正直わけが分からなかった。

「いいから。行こうよ」

僕の気持ちは見透かされていたと思う。それなのに、僕に行こうと誘う彼女の気が知れない。どういつつもりなのだろう。

「じゃあ、また明日ね。6時にここだよ。それじゃあね」

一方的に言うだけ言って、彼女は玄関の先に消えてしまった。

僕は目の前が真っ暗になった。

家に帰った僕を待ち受けていたのは、今夜からのお祭りでの仕事の依頼だった。

僕達17歳の男の子のうち抽選で選ばれた人は、特別に護人の仕事を毎年のように任されていた。正直そんな気分では全くなかったけれど、僕は出掛けることにした。何かやらなければいけない。どこかでそう考えた結果だった。

この町には、古くから伝わる夏のお祭りがある。

毎年同じ日時で二日に渡って行われ、二日目には花火が上がる。

花火云々については随分と最近になってから始まったことで、それは他の地域からやって来る人に合わせるために作られたイベントだった。

このお祭りの本来の意図は別のところにある。

このお祭りは【海送り】と呼ばれていて、海で亡くなった人々の魂に安息を与えつつ畏敬の念を込めて、お祭りの日だけこちらの世界に呼び寄せた後、再び海へ帰すという意味合いが込められている。そのことをしっかりと念頭においてお祭りを運営している人は、もう老人くらいのものだと思われけれど、でも風習として現代でも続いている行事はしっかりとあった。

それが舞児であり、護人である。

舞児というのは、この町で16歳に当たる女の子数人に舞を踊らせて、海から魂を呼び寄せるといふものだ。古くから伝わる舞児用の衣装に着替えて、華麗に舞う姿は必見と、旅行ガイドに載ってしまったりもする。彼女達はもっぱら町役場の公会堂で、夜に舞を踊ることになっている。夜の海の方が、澄んだ魂が帰って来やすくなるという伝統があるからだと聞いているけれど、詳しいことは僕も知らない。

ちなみに舞児はその後で体を清めなければならないため、汚れた外気に触れさせないために踊った場所でその日は寝泊りをしなくてはいけないという決まりがあり、つまりは踊った場所が町役場なら、役場内でその日は過ごさなくてはならない。

ここで意味を持つのが護人。その時に悪い魂を引き寄せないようにと、舞児達の寝所を交代で番をするのが彼らの仕事である。それはこの町で17歳に当たる男の子数十人に任されることで、こちらも古くから伝わる武人のような軽装の衣装に着替えることが原則となっている。ちなみに護人も、交代で見張るという任務のためか、この町役場で寝泊りをしなくてはならない。

と、要は古い言い伝えを現代になっても踏襲しているということだった。お盆の風習がこの町独特の形を取ったと考えるもいいかもしれない。

この護人に、僕は今年選ばれてしまったらしい。

その時僕はなぜか、嫌だと思いつつ何だか救われたような思いがした。それがどうしてなのかは、分からない。

そろそろ出掛けないと間に合わないわよ、と母親の声が家の奥から響いてくる。

僕はそれに応えないまま、家を出て行った。

護人という仕事は何て暇なのだろう。

駅の方に住んでいる先輩に話を聞いたことはあったけれど、これほどまでにひどいものだとは想像していなかった。ただ、町役場の前に数人で立っているだけという、本当にただそれだけの作業。これは拷問だと、すぐにそう思った。他の数人と仲良くなることも出来ただろうけれど、残念なことに向こうは向こうで既に知り合いが組まれていたようで、僕が入り込む隙間は微塵もなかった。居心地が悪いことこの上ない。

おかげで、僕は散々昼間の自分を責めたてることが出来た。

こういったマイナス思考の螺旋に引つかかることは自分には無縁だと思っていたけれど、いざ嵌まってしまつと抜け出すことは不可能だと悟った。

どうしたって、自分を許す気が起こらない。

当たり前だ。僕はミサキに最低なことをしたんだ。

もしもエイジが生きていたら、彼は僕にどんな言葉をかけただろう。僕を殴り倒してくれたかもしれない。そんなことを少しだけ思った。そういえば今の僕は護人だ。エイジの魂が会いに来てくれるなら、会いに来て欲しいと、今度は心からそう思った。

僕を罵倒するなら、そうして欲しい。今ならどんな扱いを受けても構わないと思った。

向こうが望むなら、僕を殺してくれてもいい。

そういえばエイジは妹を大事にする兄貴だった。同じ歳のくせにいつもミサキに兄貴風を吹かせて。そんな仲の良い兄妹に入り込んだ自分は、二人に何もしてやる事が出来なかったと思う。与えてやるどころか、エイジには何もしないうちから彼とは死に別れてしまつて、妹のミサキからは奪うばかりで……。

交代だ、という声が聞こえてきて、僕は初めて自分が泣いていることを悟った。

涙を拭って、僕は頷く。やっと交代だと思う一方で、もっとずっとこのままこの場所に留まっていたいという思いがした。

「誰か大事な人を、海で亡くしたのか？」

僕の涙を見た町役場の職員が、おずおずと尋ねてきた。随分と無遠慮な人だと思う。僕はもう一度、深く頷いた。今泣いている理由はそうだった美しいものではなかったけれど。

「そうか……。今日はもう寝るといい。護人用の部屋に布団が敷いてあるから」

はい、と短く返事をして、僕は町役場の玄関の中に入っていった。

第五話

夢を、見ていた。

校長先生の長い話。

そう。最後の砦は、校長先生の長い話だった。これさえ終われば、僕達の夏休みが始まる。目の前に広がっていたのは、規則正しく並んだ生徒たちの列でも、校長先生の生い先短い髪の毛でも、大あくびを惜しげもなく晒す生活指導の先生でもなかった。真夏の青い空と蝉の声であり、苺味のカキ氷と夜空を彩る花火であり、エイジとミサキと約束した、両家の旅行先の光景だった。それさえあれば、山のような宿題も、成長が伺えないことが予想される通知表も、大した問題ではなかった。小学生最後の夏。

夏休みをそんな都合のいいもので埋め尽くせるほどに、その頃の僕達は幼かった。

台風が近付いている。

そのことが、終業式を一日だけ早めた。そのことが、僕達をひどく浮かれさせたんだと思う。

先生は、早く下校をするようにと再三に渡って言い続けた。

決して、寄り道などしないで帰れと。台風が近付いているんだと。

僕達がもう少し賢ければ、先生にも迷惑をかけずに済んだのだ。

当時は何も分からなかったけれど、そんなことは言い訳にもならない。先生は僕達のせいで、この学校を去ることになってしまったの

だから。

僕もエイジも、勿論ミサキだって言うことを素直に聞かない悪ガキ、というわけでもなかったけれど、その日は真っ直ぐ家に帰ることなんて出来なかった。台風が近づ

いてきているということがどうしてあんなにも胸を躍らせたのか、今となってはほんの少しも分からない。

僕とエイジとミサキと、あと誰がいたかは忘れてしまったけれど、その時仲が良かった数人は前日に打ち合わせをしていた通り、こっそりと人通りの少ない路地裏を縫って、下校するルートとは逆方向にある浜辺へと向かった。そして着くなり、靴と靴下を一緒くたにして脱ぎ捨て、いつもよりもどこか豪快で、気持ちの悪い風が吹く海へと近付いた。みんな水着を用意してはいたけれど、さすがに入ろうと思うことはなかった。

果たして、そのことに何の違いがあったのか。危険なことには変わりなかったのに。

その海は地元の人もなかなか行かない、ちょっとした穴場だった。それがまずかった。

勿論海の家だつてないし、監視員の一人もいない。台風の前日、子供が海に入らないようにと、大人達が絶対に張り込みにきているとあらかじめ予想しておいた結果だった。

僕達は、自分達の他に誰もいない海を、まるで貸切りをしたみたいな気分になりながら、裸足のまま浜辺で遊んだ。風が強くなつてきて波が荒れ始めても、まだ大丈夫と、勝手に決め込んで遊んでいた。完璧に浮かれていた。

どれくらい時間が経った頃だったろう。

ミサキが大きなくしゃみを3回、間髪を入れずに放った。それが合図だったかのように、僕達は突然風が思ったよりも強くなつてきていることに気が付いた。

初めて、焦った。

もう帰ろうと、誰かが言った。波が心なしか、高くなってきた。気がする。

僕達は急いで浜辺へと上がり、浜辺の奥の方まで引っ込んだ。ここまで来れば、今ぐらいなら波もそうそうやっては来ないだろう。そういうことにして、用意していたタオルで脚を急いで拭いた。

僕が靴を履き終えようとしている時だった。

「あれ！ ちょっと見ろよ！」

エイジが叫んだ。普段の彼なら出すはずのない高い声だった。

あまりにも切迫した様子で、僕には最初エイジが何を言いたいのか分からなかった。エイジが指さした方を、じっと目を凝らしてみる。

それに気付いた時、僕は鳥肌が立った。

「女の子だ！ 赤いランドセル！」

エイジが、そう叫んだ。他の誰かが、やべえよ、と震えた声で戦^{なな}慄いた。

あれは、今思うと、本当に赤いランドセルだったのかは分からない。もしかしたら、赤い色をした別の何かだったのかもしれない。でも、その時の僕らはその赤いものを赤いランドセルだとすぐに思い込んでしまった。エイジの声があったからかもしれない。いずれにしても、その時僕らの目の前にあったのは、赤いランドセルを背負った女の子が溺れているという事実だった。

エイジの行動は早かった。もう靴も履き終わってランドセルまで背負っていたというのに、また靴を脱いでランドセルと服とを脱ぎ捨て、勢い良く浜辺を走りながら海へと飛び込んだ。

僕はそれを、どこか別の世界で起こっている出来事を見るような目で見ていたと思う。他のみんなも同じだったかもしれない。誰も、エイジの後に続くこととはしなかった。そして誰も、エイジを止めようともしなかった。

エイジはクラスで一番運動神経が良かった。泳ぐのもとても上手

くて、他のクラスメイトとは比べ物にならない実力を持っていた。エイジなら、きっと大丈夫だろうと僕は思っていたのかもしれない。エイジは一見無理そうなことでも持ち前の度胸と潜在能力を存分に発揮して、あらゆる不可能を可能にする男だ。その経歴が、僕にそう思わせていたのかもしれない。

エイジに頑張れと応援する応援団が、即興で作られた。

彼ならきつと溺れている女の子も救って、何事もなかったように帰ってきて。

ああ、そんな凄い奴と自分は親友なんだと、その時僕はなぜか涙を流すほどに誇らしい気分であっただった。

頑張れ。エイジ頑張れ。

子供達の声が、風にかき消されながらこたました。

第六話

異変に気付いたのは果たして誰だったろう。

僕はエイジがこつちへ向かって泳いできているとばかり思っていた。誰かが何かがおかしいと呟くまで、僕は笑顔を浮かべていたりなんかもしていた。

僕はそのことに気付いた。背筋に怖気が走るのを感じた。

エイジが溺れていた。

……やばい。

僕はことの重大さを瞬時に理解していたはずだった。誰か、大人に助けを呼ばなくてはいけない。そのことを頭の中では分かっていたはずだった。

でも、その時の僕に出来たことといえば、呆然と海の彼方を見つめることだけだった。

助けを、呼ばなくては。

そうだ、誰かを呼んでこなくては。エイジが、エイジが溺れてしまっ。

エイジが死んでしまっ……。

死んでしまっ。

……やばい。

やばい！！

僕は叫んだ。

誰か助けてっ！！

僕の声は震えていて、正しく言葉を紡ぐことさえ出来なかった。それでもやっとの思いで叫んだ声に、触発されたように他のみんなも助けを呼び始めた。誰か助けて、と泣き叫ぶ子供達の声が、海に渦巻いた。

誰も来ないことに舌打ちをした友達が、助けを呼んでくる、と浜

辺に僕とミサキを残して他のみんなを連れて道路へと向かった。

僕は相変わらず、めくれあがった声で助けて、助けてと繰り返していた。それはミサキも同じだった。早くしないとエイジが……

エイジが、

……エイジ？

その光景を、僕は見てしまった。ミサキだつて見てしまっただろう。

遠く、取り返しのつかない距離を空けた海の間こう。

海に沈んでいく、エイジの右腕。

大人達がやってきた時はもう全てが手遅れだった。

浜辺にどかどかと大人達が乗り込んできた時、僕とミサキは力なくへたり込んで、意味もない言葉を連呼させながら、泣き叫んでいたという。

その辺りの記憶ははっきりとしていない。青くて黒い海を前に、泣き叫んだことは覚えている。そこからどうやって家に帰ったのか、それはまるで分からない。

気付いた時、僕は家のベッドの中にいた。

瞬間、僕は悟った。

夢だ。怖い夢だ。そうだ、そんなバカな話があるわけない。

安心しきった顔で、二階の僕の部屋から一階に降りた時、僕を待っていたのは神妙な面持ちの両親だった。

父親が、降りてきた僕に告げた。

台風がやって来て海が大荒れた、と。エイジの捜索が打ち切られたらしい、と。

汗だくになりながら、目を覚ます。

僕は町役場の、護人用に用意された部屋の中で、一人肩を揺らし

ながら息をしていた。

気持ちが、とても悪い……。

僕は口を押さえながらトイレへと駆け込んだ。

一気に吐き出すことが出来ても、それは単に食べたものを吐き出すだけのことで、もしも僕が抱えている何もかもを吐き出すことが出来れば、とても楽なのに、と少し思う。

それはそう簡単に許されることではなかったようで、僕の中には片付けることの出来ないわだかまりが残った。それは、決して消えないものに思えた。

僕は気持ち悪い汗を滴らせながら、ゆっくりと町役場の窓を開ける。

護人の仕事をしながら僕の中に浮かんだ一つの案を、決行することにした。そうすれば楽になれるかもと、期待していたのかもしれない。

逃げ。逃げだと思う。

窓からこっそりと抜け出して、僕は夜の町を妖怪のように徘徊した。

夜の海は、恐怖の一言に尽きる。

地平線と水平線の境界が分からない。そのことが、とてつもない恐怖として僕には映った。波の音も、激しく身震いをさせてくるばかりで、僕に安らかなものを与えてくれることはなかった。エイジの命を奪った、憎らしいはずの海。僕はあの日以来、海に入ることが怖くて出来なくなってしまうていた。海は僕からもあらゆるものを奪ってきた。

そんな怖い海も、僕には今、とてつもなく愛しいものに思えていた。目の前のそれが怖いものであることが、ただひたすらに嬉しかった。

こいつなら、きっと。

僕は浜辺を下り始めると、押し寄せる波を手で掬ってみた。ねっとりとした纏わりつくように、指と指の間から肘へと雫が抜ける。妙に冷たく思えた海の水も、その頃には体温と同じだった。

僕は、その時、意を決した。

こいつなら、きっと、僕を殺してくれるだろう。

海へと進む。

ざぶざぶと音を立てながら僕は海へと向かって歩き続けた。不思議と、恐怖はなかった。ただ、安らかな思いでいっぱいだった。

進みながら、僕はいろんなことを吐き出してしまえる思いがした。荒れ狂う海に向かっていくエイジを、止めることが出来なかったこと。それ以前に、あの頃から僕がエイジに密かに抱いていた、嫉妬と羨望。

ミサキを犯そうとしたこと。こんなにもミサキが大好きだということに、彼女を悲しませることしか出来ないような自分。独り善がりの醜い塊。

僕はこれから、一体どれくらいのを失って、どれくらいのものを奪い続けるのか。それを考えた時、僕は生きていくことが虚しくなった。誰にも何も与えられず、与えられたものは失い続け、そして他人からは奪い続ける。そんな自分は死んでしまえばいいと、心からそう思えた自分が、最後まで悲しかった。

海の水は、腰まで浸かり始めていた。

その時だった。

僕は無数の人影が、海から浜辺に向かって登っていくのを感じた。それはぼんやりとした影で、視界の端にちらつくような、そんな不透明な像を象っていた。

辺りに霧が立ち込める。明らかに異形の世界だった。

でも僕は、きっとここはあちら側の入り口だと妙に安心した気持ちで、その場にいた。海の水はもう、胸の辺りまで達している。この時、僕は海に全く波がなくなっているということに、やっと気付いた。

僕は確信した。これで、向こう側へ逝ける。

僕は笑っていたと思う。

第七話

「お兄さん、どうしてこんな所にいるの？」

突然の声に、僕はふと我に帰った。妙に高くて子供っぽい、実体を持ったような声が聞こえたような気がする。

「こつちこつち」

ふと見ると、水平になつた海の上を、狐を象つたようなお面を被り、白と藍色の甚兵衛を着て、右手には風車を持った男の子が、ひっそりと立っていた。

「お兄さん、生きてるんでしょ。こつちに來たらだめだよ」

男の子は当然のように僕に左手を差し伸べてきて、早く帰らないと、と僕に右手を出すように促した。

「……いや、僕は戻れない。僕はもう、死にたい」

僕は拒む。もう今さら、もといた場所に戻る気にはなれなかった。「バカなこと言っちゃいけないよ。こつちは逃げてくるような場所じゃない。しっかりとお兄さんは自分の現実に向き合つて、それからじゃないとこつちも受け入れられないよ。お兄さんだって、本当にこれでいいなんて思つてないでしょ？」

それは、その通りなのかもしれない。これは最悪の選択だと思つ。それを自ら望んでやろうとしていたわけだけれど、突き詰めたら迷い始めるから、考えないようにしていただけなのは確かだった。

「僕は……ひどい奴なんだ。ひどいことばかりして。こんな奴に「生きる資格なんかないつて言っんなら、ぶつ殺すよ？」

あまりにも醒めた声だったから、僕は思わず怯んだ。

「ほら、死ぬのはやつぱり怖い。そんな薄っぺらい覚悟しか持つてない人が来ていいような場所じゃないんだから。ほら、戻るよ」

僕は男の子に連れられるようにして、濃い霧の中を進んだ。霧は既に辺りに遠慮なく立ち込めて、もう前も後ろも分からなかった。ここが海なのかさえも、怪しくなってくる。僕は、本当に異世界に取り込まれてしまったのかもしれないなかった。

そう思った途端、今さら怖くなった。

突然、戻りたいと本気で思った。

「お兄さん、戻ったら何がしたい？」

男の子の声が、唯一僕を正気に繋いでいた。この子がいなければ、僕はとつくに発狂していただろう。

「そうだな……。謝りたいかな」

「そっか。じゃあしつかりと謝ってこなきゃ。それだけを今は考えなよ」

謝りたい。そう思った途端に、いろんな顔が頭の中に浮かんだ。

親や友達や、ミサキ。僕はやっぱり逃げ出そうとしていたんだと悟った。謝ることも向き合うこともせず、一人で逃げ出すのは卑怯だと、今はそう思うことが出来た。

「お兄さんは自分がひどい奴だって言ったけど、みんなそんなもんだよ。でも、みんなそこからどうしたらいいかって悩んでる。逃げ出す人もいるし、向き合う人もいる。お兄さんは向き合うことに決めたんだから、最後まで向き合いなよ」

難しい話はこれでおしまいっ、と男の子は初めて子供らしい口調で話を終わらせた。どうにも、自分よりも小さな子供に説教されてしまったことは、気恥ずかしい。死者は子供でも、いろんなことが分かっているのだろうか、などとよく分からないことを僕は考えていた。それくらいの余裕を持てるくらいには、どうやら回復したらしい。

死のうだなんて、さっきまでの僕は、やっぱりどうかしていたんだろう。そう決めることにした。

「ここでお別れだね」

はつきりとした色を持って、大地が目の前に現れた。霧が濃いせいで、この向こうに何があるのかは分からないけれど。

男の子が手を放す。

「このまま進めば、きっと戻れるよ。僕はこれから行かなきゃいけないところがあるから、ここでお別れ」

男の子の声は、少し寂しそうだった。

「ありがとう。本当に」

「ううん。気にしないでよ。あと、最後に重要なことを言うから。

ここから先は、絶対に振り返っちゃだめだからね。前を向いて、前だけを向いて進むんだ。何があっても絶対に振り向かないで。絶対だよ。絶対だからね」

妙に念を押してくる。僕はその勢いに気圧されて、意味もなく何度も頷いてしまった。

「それじゃあ、さよなら」

男の子は僕の背中を押すと、一緒に来ることなく、その場に留まった。

僕は前へと進む。

言われた通り、振り返ることなく。

三歩くらい、歩いた時だった。その声は突然、後ろから響いた。

「ミサキのこと、よろしくな」

男の子の声だった。僕は息を呑んで、一瞬振り向きそうになった。「振り向くな！ そのままだ。そのまま聞け。」

僕にはそれが、泣き叫んでいるように聞こえた。

僕は前へと進む。

「紅茶、ありがとう。すっごく美味かった」

進む。

「毎年、来てくれて、ありがとう。お前ら、大きくなったよな。お前達は、ずっとずっと、これからもずっと、生きてくれ。生き抜いてくれ」

進む。

「幸せになれよ。いつか本当に幸せになって、どうだった、俺に自慢しに来てよ」

僕は走り始めた。前だけを見て、全力で走る。涙が頬を伝った。

「ミサキを泣かせるなよ。絶対だからな」

声が遠のく。僕は嗚咽を我慢しながら、転びそうになりながら、それでも走った。

「じゃあなっ！ 頑張れよっ！ じゃあなっ！」

ツカサがいないと聞いて大騒ぎをしたのは勿論ミサキで、最初は軽く考えていた町の人々も、本当に見つからないと気付き始めて慌てた。

町の老人は口々に言った。これは本当に、海から来た悪霊に持って行かれてしまったのかもしれないと。縁起でもないと言っす人々も、その顔はどこか不安そうだった。実際、この町では夏にそのまま行方不明になる人がいたという記録がちらほらとある。そのことが尚さら、人々を不安にさせた。

ミサキは半狂乱になって探したという。

それを聞いた時、僕は本当に申し訳なかったと、素直にそう感じた。

「ツカサっ！ ここにいるのっ!？」

勢い良く開け放たれたドアの先には、ミサキが立っていた。その後ろに、中学の時の同級生が何人が続いている。

僕は小さく、湿った床の上で体を濡らしながら、震える息を連続させていた。

「しっかりして！ ツカサ！」

温かい感触が、した。肩を掴むミサキの手が、突然いとおしく思えた。

僕の中で、小さく何かはち切れて、その直後に嘘みたいな涙が溢れ出した。嗚咽も止まらない。目の前が海の中で目を開いた時みたい、どこまでも滲む。

「ツカサ……?」

僕は、ミサキを力いっぱい抱き締めた。泣き声が止まらないことも気にせずに。

ミサキは暫く呆けた顔をしていたけれど、その後で僕を優しく抱き返してくれた。

海送り - sea saw -

第八話

使い古されて、誰もいないはずの公民館に、僕はいた。

墓地の近くにある、例の幽霊屋敷。

それだけでも僕が幽霊にさらわれたと噂されるには十分だった。それ以上に不気味だったのは、僕がいた場所というのが公民館内の浴場で、もう水も通ってないというのに、大きな浴槽の中には生温くなった水がどっぷりと入っていたということだった。

おまけにこの水が、妙に黒い。

子供達が聞けば鳥肌を立てさせるような怪談が、見事に成立してしまった。

僕は突然、神隠しになりかけた人間として町で有名になってしまった。状況を考えれば当然のことだと思う。怖すぎる。僕が発見された時のことを後から聞いただけでも、誰だって同じことを考えるだろう。

ところが肝心な僕はといえば、一体何故あそこにいたのか全く思いつけなかった。

本気で、神隠しに遭いそうだったのかもしれない。僕の背筋にだんだんと怖気が走ってきたが、考えないことにした。

町の人々の反応はまちまちで、気持ちが悪い腫れ物を扱うように僕に接する老人もいれば、神隠しに打ち勝ったと縁起物みたいにして僕を祭り上げる老人もいた。同級生くらいは、いい話題のタネとして僕を格好のいじられキャラにしたり、ミサキに泣きついたという噂を聞きつけて、超級に情けない男の代名詞を僕に授けたりしてきた。

父親からは、心配かけさせるなど一発怒鳴られただけで、それだけだった。母親なんてけろっとしている。

一番心配してたらしいミサキは、僕に散々バカバカと喚いた後で、ぐっすりと眠ってしまった。こればかりは、とても胸が痛んだから、あとで一緒にお祭りに出掛けた時に、何かお詫びをしようと思う。

それにしても、僕はどうしてあんな所にいたのだろうか。

思い出せない。

浴衣姿で現れたミサキは妙に可愛くて、僕はやばいなあと内心で焦っていた。そんな僕の気を知ってか知らずか、ミサキは早く行こうと僕の手を取って歩き出す。

お祭りはかなりの盛況で、僕とミサキは人込みに思い切り揉みくちゃにされて、やっと落ち着けた頃にはお互いで2回戦目を交えた後の如くに疲れていた。

「もう、ダメかもしれない……」

ミサキが苦笑いをしながら言う。僕もそれに合わせて小さく笑った。

座れる場所を見つけて、僕達はそこへと移動する。

二人で、買ってきた焼きソバを食べる。買ってから食べられるような場所に着くまでに随分とかかかってしまったから、もうかなり冷めてしまっていた。

「でも美味しいよね」

ミサキが笑っているから、それでいいような気がした。でも、正直言って僕には冷めた焼きソバが美味しいとは思えなかった。

食べ終わると、ミサキが僕の肩に頭を寄せてきた。

いわゆるまったりモードに突入したわけだけど、僕にはやらなければならぬことがあった。意を決して、ミサキに話し掛ける。

「昨日は、ホントにごめん。どうかしてた」

僕は、頭を下げた。本気で謝りたかった。

「……いいよ。私が悪かったんだから」

「いや、原因はどうあれ、あれは本当に僕が悪かった。本当にごめん」

思い出し始めると、どんどん僕は自分が許せなくなってきた。齒を食いしばって、今はミサキに謝り続けることに徹しようと、拳を握る。

「……うん。分かった。もう二度としないでね。それを約束してくれるなら、いいよ。もう一回やったら、私、ツカサを捨てる」

「…………」

「これで、いい？」

「…………」

「……ホントは怖かったんだから。昨日……」

「……わかった。それで頼むよ」

釈然としないのは、仕方がないかもしれない。本当はどう言っただ欲しかったのなんて僕には分からない。ただ、もう僕は二度とミサキを無理矢理に押し倒したりはしない、そういうホントに当たり前な約束が交わされたという結果はあった。

僕達二人の恋愛は、もうこれ以上に発展しないかもしれないし、僕が決定的なものを破ってしまったことで、お互いの距離はこれまで通りにはいかないかもしれない。逆もないことはないかもしれないけれど、それにはきつと凄く時間がかかると思う。

これで、いいんだ。

僕は、どのような結果になろうと、ミサキとこれから付き合っていくことに決めた。最初はここで別れてしまおうと思っていたけれど、途中で逃げ出したら、それは卑怯な気がした。僕は僕なりの

責任を果たすべきなんだろう。

妙にさっぱりとした自分に、僕は少し不思議な感じがした。

花火が上がった。

偶然だけれど、僕達の座っている場所からとてもよく見えた。

僕が間抜けな大口を開けて上を見ていると、ミサキが手を握ってきた。

「私も、もっとこれからは、ツカサに迷惑をかけないように、頑張るから」

「……………うん」

「もっと一緒にいたい。お願いだから、ツカサまでいなくならないで」

「……………」

ミサキは寂しかったのかもしれない。自分の前から、当たり前と思っていた人が消えてしまうのが。エイジは、ミサキのお兄さんで生まれた時から一緒にいた兄妹で。

先に、いなくなってしまうって。

僕はエイジが死んだ後の、ミサキ一人には広すぎる部屋の中で、エイジの持ち物が悲しく持ち主の帰りを待っていたのを思い出した。ミサキは毎晩ずっと、一人でその部屋で眠ることに苦しみ続けてきたのかもしれない。

今でもずっと、ミサキの部屋の中に生きているエイジの形見。それをずっと残しているミサキの気持ち。

それを僕は前に、事もあるうか、早く捨ててしまえばいいのにと思ったことがあった。

僕は、純粹に、エイジに嫉妬をしていたんだと、今はっきりと分かった。

そして、ミサキの中に、僕が越えられないと思っていた壁なんて、最初からなかったということにも。

海送り - sea saw -

最終話

「エイジのことは、頑張っただけで忘れる」

ほらみる、と僕は僕に言ってやりたくなった。しまいにはこんな悲しいことをミサキに言わせてしまったと。こんなことを、ミサキに言わせたかったわけじゃない。

僕は首を振った。

「忘れるなよ。ごめん。全部、僕のせいなんだな」

昨日、同じようなことをミサキに言われたような気がした。何がミサキのせいなもんか。

どう言えればいいだろう。僕は逡巡する。

「エイジのことは、ずっと覚えてよう。僕は頑張っただけで、ミサキとこれからも頑張っただけで、それで……エイジの墓の前で、どうだって自慢しにいかないんだから」

「へ？」

「心配するなって。僕がついてるから、ミサキの心配はするなって。僕は、やっと、自分の中にあつた汚らしいものに別れを告げることが出来た気がした。」

「……何それえ」

吹きだした後で、ミサキの顔がゆるやかに笑顔に変わっていく。

「いいじゃん。もうこういうクサイ話はおしまい」

「本当にクサイよね。何、そういうこと言う人だったの、ツカサつて？」

「もう忘れてくれ。もういいから」

「すっごい面白かった」

「ああもう」

周りにいつの間にか出来ていた人だかりに、ご馳走様でしたと言

われながら、結局僕達はまた場所の移動を開始する羽目になった。

花火が、立て続けに上がる。

それにしても本当に恥ずかしかった。どうしてあんな言葉が出てきたのか、さっぱり分からない。思い出すと、顔から火が出そうだ。まだ後ろで意地悪そうに笑うミサキに、頭を抱えなくなった。一生、ネタにされるかもしれない。

「きれいだね」

やっと落ち着けた場所は、結局ミサキの部屋だった。開け放たれた窓からは、思いの外きれいに花火が見えた。

「ミサキ、僕さ」

「何？」

「エイジのこと、ずっと憧れてたんだ」

ミサキは何も言わなかった。

「何でも出来るしさ、すごくカッコ良かったし。でも実は、本当は悔しかったんだ」

「……うん」

花火の音が、こだまする。

「でも、ツカサがお兄ちゃんみたいだったら、私きつと好きにならなかったよ」

「え？」

「お兄ちゃんも好きだけど、それだけなんだから。ツカサは、それ以上に大好きなんだからね、私は」

その時、大きな花火がどかと爆発して、彼女の顔を照らした。「キス、しようよ。いいでしょ？」

僕達は、自然に唇を合わせた。ミサキが腕を回して、僕の頭の後ろで組んだ。

離れた後で、ミサキが顔を赤くしながら、ボソツと零す。

「ツカサは、ツカサだよ」

ああ、と思った。やっぱり、ミサキはとても可愛い。

僕達は、静かに抱き合ったまま、花火を見続けた。

来年も、こつやつてミサキと二人で花火を見ていたいと、純粹に
そう思った。その時は、エイジのお墓に、冷えた紅茶を持っていこ
う。

お祭りの喧騒と、花火の音を聞きながら、僕達はもう一度キスを
した。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802c/>

海送り - s e a s a w -

2009年6月27日05時19分発行